

「白米」。私が忘れられない言葉です。私が中学生の時、私の先輩が学級目標として掲げた言葉でした。先生がこう教えてくれました。「白米はどんなおかずとも合う。辛いもの、甘いもの、何でも決して拒むことなく静かに受け止めて、ひとつの食卓をつくる。そんな存在なんだ。派手ではないし、目立ちもしない、でも確かにそこにある。あるだけで安心できる。そんな存在なんだよ。」と。先輩たちはたしかに白米のようなクラスを目指していたのだと思います。どんな違いも、拒まず受け止めるクラスを。

私は受け止めることがどれほど大切なものか、あとになって思い知ることになります。実際、私は家族ですら受け止めきれていませんでした。

それは私の母のことです。私の母は左耳が聞こえません。外見ではほとんどわからないけれど、日常の中ですこし不便を感じる、そんな障害です。外出先で私が母の左側からはなしかけたとき、母は右耳を近づけながら言う、「ごめん。もう1回言ってくれない?」私はそんな姿をずっと当たり前の光景として見ていました。でも、それによって対立することもよくありました。

ショッピングモールで流行りの商品がならんでいた時の話です。

私は母に「ねえ、この商品なにに使うんだっけ」と話しかけたけれど、反応がなく私は、つい苛立ちを口にしてしまいました。「なんでそんなのも聞こえんと?」私の母は雑音が多い場所では本当に聞こえづらくなるそうです。しかし母は「そうだね、ごめんね」といつものように笑顔をみせてくれました。その笑顔はどこか寂しそうでした。その夜、ふと布団の中で気づいたのです。母の左耳は聞こえない。母は聞き取れないまま、笑顔で不安を押しつぶしていたのかもしれない。左耳が聞こえないというのはただ片耳の聴力が失われているだけではない感覚なのかもしれない。そう思ったとき私は胸が締め付けられました。私はずっと「聴力が単に半分になるだけじゃないか」と思いこんでいました。母がどれだけ聞き取ろうと頑張っていたのか、母が聞こえないことにどれだけ不安や葛藤を抱えていたのか。私はただ、自分の感情を母にぶつけただけでした。何一つ現実を受け止めていませんでした。母の立場を考えずに。私は気づきました。人はすぐに解決しようとします。正しいことを言おうとします。アドバイスをしようとします。でもその前に大切なことがあるのだと。それは、「受け止めること」です。相手の痛みや違いを、まずはそのまま受け止めること。それは特別なことではありません。意見が友達と違ってまずは相手の意見をきいてみること。家族の話最後まで聞くこと。周りの人の困っていることに気づくこと。ただ、そばにいてあげること。そんな身近なことから始まるのだと思います。

あとから母に聞いた話があります。母の職場では同僚の方たちが自然と母の右側に座ってくれるそうです。母が聞き取りやすいように、何も言わなくてもそうしてくれるのだと。ほんのすこし相手の立場を想像したり、自分と違うところを受け止めたりすること。それだけで人は誰かの安心になれる。私は時々うまくできません。つい自分の考えを先に言ってしまうこともあります。それでも、少しずつでも、相手を受け止めることができる人になります。私は母と話すとき必ず右側に座って、こう言います。「聞き取れなかったら、遠慮なくいつてね。」すると母は笑顔で「ありがとう。」と喋ってくれます。

白米はただのご飯ではありません。違いを受け止めることの大切さを静かに教えてくれる存在です。派手ではない、目立たない。でも、そこにあるだけで誰かを安心させます。受け止めることが誰かの安心を作ります。そしてそれが、社会を少しずつ明るくしていくのだと思います。白米のような人にまだなれていない私。でも少しずつ近づいていきたい。違いを拒むのではなく、まず受け止められる人に。そんな小さな一歩がいつか誰かを少しだけ安心させると信じています。白米のように受け止める。それが私達がすべき第1歩です。